

戦没農村青年の日記を巡る一考察

井上佳子

A Study on the Diary of War Dead Rural Youth

Keiko INOUE

851-2195 長崎県西彼杵郡長与町まなび野 1-1-1

長崎県立大学 国際社会学部 国際社会学科

Department of Global and Media Studies, University of Nagasaki,

1-1-1, Manabino, Nagayo-cho, Nishisonogi-gun, Nagasaki Prefecture 851-2195, Japan; inoue28@sun.ac.jp

日中戦争や太平洋戦争で戦没した農村青年の日記や手紙に共通して書かれているのは「滅私奉公」や「最後まで頑張る」などの「国のために働く」強い思いである。背景には、当時の農村の相互依存や教育のありよう、昭和恐慌などによる農村の疲弊があると考えられる。著者の祖父井上富廣が残した日記などをもとに考察する。

キーワード： 戦争、農村、陣中日記

はじめに

著者の祖父、井上富廣は、1911（明治44）年、熊本市郊外の農村（現在の熊本市南区、当時の飽託郡藤富村）の小作農家の長男として生まれた。耕作していたのは6反で、主に米、麦の二毛作である。

1937（昭和12）年8月、第六師団歩兵第13連隊の衛生兵として応召。翌1938（昭和13）年7月、中国安徽省太湖付近の戦場で頭部に銃撃を受けて戦死している。26歳だった。死後衛生伍長に進級している。

著者の手元には、1930（昭和5）年、32（昭和7）年、33（昭和8）年、34（昭和9）年の日記、そして、応召後に家族にあてた手紙やはがきが現存している。故郷にあつて野良仕事をしていた二十歳、22歳、23歳、24歳の日記は、大地を耕す喜び、恋愛、結婚の幸福が綴られている。戦争に向かう時代であっても、人びとにはごく当たり前の日常があったことが伺える内容である。

1937（昭和12）年8月から十か月間、富廣は、熊本市の熊本陸軍病院に勤務している。そして1938（昭和13）年6月に門司から中国に向かい、わずか49日後に安徽省の太湖で戦死している。熊本陸軍病院や中国から家族にあて書いた手紙では、富廣は男手のなくなった野良仕事を案じている。

出征前、出征後を通じ、富廣が繰り返し記しているのは、

国のために働きたいという強い思いである。「滅私奉公」「最後まで戦う」などの言葉が、日記や手紙に頻繁に出てくる。最後の日記となった1938年7月22日まで、戦争の大義を疑ったりする様子は全く伺えない。

1961年に発行されている「岩手県農村文化懇談会」編『戦没農民兵士の手紙』は、728人2873通の農村出身兵士の手紙をもとに編まれている。これらの手紙を読んだとき、驚くほど富廣のものと同通っていると感じた。

一方で、戦没学徒兵の家族への手紙や日記をもとに編まれた『さけわだつみのこえ』は、学問の世界と現実との矛盾に苦悩する学徒兵の生々しい声が綴られている。¹

これら学徒兵と、農民兵士との間には明らかな違いがあると感じる。もちろん、富廣の日記や『戦没農民兵士の手紙』に収められた手紙や日記、そして『さけわだつみのこえ』に採録された学徒兵らの声が、農村青年の、また学徒兵のすべてを表しているわけではないが、彼らの背景には大きな違いがあると考えざるを得ない。

富廣をはじめとした農村青年の「国のために働きたい」という強い思いが、アジア、太平洋地域へと侵攻していった日本の戦争を結果的に支えたとするならば、その背景を考察することは意味のあることと考える。井上富廣の日記や手紙、『戦没農民兵士の手紙』に収められた日記や手紙をもとに、当時の農村の状況と戦争との関わりを考察する。

日記及び手紙は、この論考の執筆に際し、必要と思われる

部分を抜粋している。昭和初期の漢字、言葉遣いは現在の漢字や言葉遣いになおしている。富廣の日記には、一部、中国に対して差別的な表現もあるが、当時の世相や状況を表しているものと捉えそのままとした。

「岩手県農村文化懇談会」編『戦没農民兵士の手紙』からの抜粋では、書かれた方のお名前は省略させていただいた。

1. 村という社会

1.1 相互依存

当時の村社会は、田植えや収穫、水の管理など日々の農作業をはじめ、祭りやもちつきなどの年中行事、また結婚、葬式など、人々のライフイベントに関することまで、協力して行う共同体であった。

富廣の日記には、田植えを共同で行う様子が記されている。

「今年は思いがけない早々しく田植えが訪れた。甲斐甲斐しく衣装せし女人も青年も踊る心は皆同じく、貝の字をさして急いだ」 1933（昭和8）年6月24日

「雨の中を本田までいく。昭和九年度の初田植えだ。晴れの衣装も甲斐甲斐しく、並ぶ菅笠も揃って歌うや田植え歌。長閑な田園に響いていく」 1934（昭和9）年6月27日

「貝の字」「本田」というのは、集落の小字である。当時はもちつきや、葬式も、共同で行っていた。

富廣の日記の出納の欄には、自分が手伝ったほかの家の田植えの日数や、自分の家の田植えに来てもらった人数や日数、一日あたりの日などが記されている。「一日半」など、半日単位となっている。

1933（昭和8）年の田植えでは、富廣はほかの家の作業に十日でかけている。自分の家の田植えには、十人来てもらって合計8円50銭を支払っている。馬使いには2円50銭支払っている。農作業の相互扶助は、「助け合い」という名のもとの大雑把なものではなく、金銭のやりとりを伴うものだったことがわかる。

当時の農村は、近隣の力を借りなければ生活が維持できなかったため、家を出る出征兵士たちは、自分がいなくなった後の農作業が円滑に進むかどうか、大きな不安を胸に戦地に向かったと思われる。富廣は出征後、戦地からも、近隣の人たちにこまめに手伝いに対する礼状を書いている。妻にあてた手紙には、手伝ってもらった時はその都度知らせるよう言っている。

「承れば家業も順調に運びし剛も良く育成しているとの事。僕も安心のこの上もない事だよ。植七島も少しはいたんだでしょう。それからじねんはよくうらを切るんですよ。うらさえ切れれば大丈夫だから。稲も茂ったでしょう。加勢があったらその都度報知してくれ。礼状を出すから。新地のハツエさん方には礼状を出しました」 1937（昭和12）年8月8日
「愚生もおかげながら無事軍務に勉励いたしておりますれば

他事ながら御休心下され。承りますれば取り入れは無事済みました様子。新田起こし麦播きの方はどうですか。馬使いは誰かに頼みましたか。永い間帰郷せず家庭の方もわかりません。ちょっとお知らせください」

1937（昭和12）年12月3日

『戦没農民兵士の手紙』でも、出征兵士たちは、戦地から家の農作業を心配する手紙を書いている。²

「家の方も晩秋蚕で忙しく非常時ですね。本当に申し訳ないです。稲の穂も出て増産の秋でしょう。もう早稲は刈れるでしょう」

「農繁期で大多忙のことでしょう。肥料等も今年は十分に買えなかった事でしょう。馬も家のは十分に働かせられなかった事と思ひ居ります。野砲隊の馬を一頭貸してやりたいですね」

「稔りの秋も参りましたね。今年も最後の一頑張りと言う処ですね。多分豊作かとは想像致して居りますが、でもやっぱり聞かぬ内は不安を感じるのであります」

「遠い故郷はすべて想像も付かぬけれども、今頃は秋仕舞も終り寒い木枯の風によやく冬の訪れを感じながら毎日を送って居らるる事と御察し申上げます。夜を日について黙々として職場に御奮闘なさる皆様の鉄より固き尊い精神を思えば、毎日の御奉公等は万分の一にも過ぎず」

1.2 強まる相互監視

日中戦争勃発以降、戦死者も急増し遺家族の援護が急務となっていく。そんな中、1938（昭和13）年11月に軍人援護会が設立され、その下部組織である銃後奉公会が、各市町村につくられた。

もともと共同体であった農村は戦局が長期化するにつれ、国によって、さらに組織化されていく。

富廣の故郷、藤富村の銃後奉公会設立時の記録が残っている。会長は村長の橋本鶴彦で、副会長は小学校長となっている。評議員として在郷軍人分会長、警防団長、方面委員らが名を連ねている。

会則には「国民皆兵ノ本義ト隣保相俟ノ精神トニ基キ拳村一致兵役義務服行ノ準備ヲ整フルト共ニ軍事援護ノ実施ニ当リ益々義勇奉公ノ精神ヲ振作スルヲ目的トス」とある。

事業として、兵役義務心ノ昂揚、隣保相俟ノ道義心ノ振作、兵役義務服行ノ準備、労力奉仕其ノ他家業の援助、慰問慰藉などが挙げられている。³

隣近所、助け合いの精神で村を挙げて兵役の義務が果たせるよう、奉公の精神を振るおうというのである。各市町村とも、銃後奉公会は、会旗を作成し、バッジを着用して、第一線將兵に慰問状を書いたり、戦傷病者の慰問、慰霊祭の執行などを行った。

その中で最も重要だったと思われるのが、出征軍人の留

守家族、戦死者の遺家族への農作業の労働奉仕だった。

藤富村の銃後奉公会が出征軍人に対する慰問袋に入れた手紙に、次のような一文がある。

「次に太田黒辰彦を銃後奉公会の専任職員として起用する事になりましたから幾分皆様のお留守宅のお世話が今迄より手が廻るかと思はれますから此の点御安心下さい」。

日中戦争から太平洋戦争と突き進み、戦時体制が強化されていくにつれ、集落の人々の相互のつながりもさらに強くなっていった。それは同時に相互監視も強まることも意味し、集落からスパイや戦争忌避者など、「非国民」を排除することになった。

教育や、メディアで「皇国民であること」が強調され「名誉の戦死」がもてはやされた時代、当時の青年たちは、早く戦地に行き、「勇ましく闘う」ことを目標とした。相互監視が強い農村は特にその傾向は強かったと思われる。

富廣が熊本陸軍病院に勤務していたころ、家族にあてた手紙は、早く戦地に行きたいと焦りにも似た思いを綴っている。

「今度野戦に出動する人員は今日確定しました。不幸にも僕はその内に入りませんでした。僕より年下の若い連中ばかりですよ。明日が軍装検査でここ数日中に出征する模様」

1937(昭和12)年5月17日

「外出ができれば帰郷するよ。もう立派に残留と決定した事だからね。兵站病院付として出征する看護兵が病院へ準備のため来るがうらやましくてね。実際出征したくて仕様はない。うづく心をおさえて勤務しているわけだ。故郷の同じく立った人たちも皆出征と聞けば実際やりきれぬ。然し何事も運命だ。何も彼もあきらめが第一だ」

1937(昭和12)年8月31日

岩手県農村文化懇談会『戦没農民兵士の手紙』にも、同じような記述がある。⁴

「兄上様は三人共、第一線に行って居るのに僕ばかり内地にいるのは父母様や皆様にも申訳がありません。長い間内地で訓練をした傘下兵としていつか新聞で父母様に聞かしてやるからそれまで待つて下さい」

2. 教育

当時の軍国教育が農村青年に及ぼした影響は大きい。16歳から20歳までの青年に軍事教練を施した青年訓練所は兵士の育成機関だった。

2.1 青年訓練所

1930(昭和5)年当時、二十歳の井上富廣は、実業補習学校と青年訓練所に通っている。

当時、男子は義務教育の尋常小学校を十二歳で卒業した

後、高等小学校などに進学しない者は実業補習学校に進んだ。実業補習学校では、修身、読書、習字、算術などの基礎的な学習のほか、工業、商業、農業に関する基礎知識など地域に応じた教育をした。

同時に青年訓練所に通う者も多かった。

青年訓練所は、1926(大正15)年に勅令によって設置され、16歳から20歳の男子を対象に軍事教練を施した。学科と軍事教練がそれぞれ四百時間設定され、旗信号、陣中勤務、距離測定などの訓練が行われた。

「熊本県史」には、その目的について記されている。⁵

「この時期における社会教育活動の課題は、満州事変から日華事変を経て太平洋戦争へと向う我が国の戦争体制に即応して、その国策を最も効果的に遂行すべく国民を編成することにあつた。したがって、そのための指導体制をできるだけ系統的に、かつ全面的に整備することが、この時期の社会教育行政一般の目的となつたわけである」。

青年訓練所は、徴兵前の男子を平時から訓練し兵士を育成する機関であった。

富廣の日記には、青年訓練所での訓練などが記されている。

1932(昭和7)年の日記には、ラップ手として、早朝自転車集落をまわり、訓練所の生徒の起床を促している様子が記されている。

「五時に起きいで起床ラップを吹き自転車訓練に出席したが今朝も遅刻であった。号令調整、散兵教練などに力を振るう」

1930(昭和5)年10月3日

「母に起こされぱつと飛び起きるなり黎明の大地の静寂を破って吹くラップの音。おお親愛なる訓練所諸君目覚めて呉れ。陣中勤務の動作をやり元気で帰途についた」

1930(昭和5)年10月7日

「少し早く起きてらっぱを吹いた。おお響く音よ、友の耳だに告げて来いよ」

1930(昭和5)年10月9日

「教練査閲」は一年に一度行われた。教練査閲は、日頃の教練の成果を評価し、兵役に適するかどうかを判断する節目となった。

「昨夜早く寝た故、今朝は訓練に起きるのに都合がよかった。査閲も近づいた故、それぞれの顔には緊張しているのがみゆる。散解の動作があつたが愉快に過ごした」

1930(昭和5)年10月26日

「午後四時を期して明日の査閲の予定が行われる故、栗引く手も中々落ちつかぬ」

1930(昭和5)年10月27日

「今度の査閲官の厳格さはその顔面にあらわれている。一挙手一投足にもその炯眼をそそがれ青訓生一同いやがうえにも緊張し、折りからの降雨もものかわ諄々とすすんでいく。学科試験も大概でき、その上身に余る賞状までもらつて光栄を感じた」

1930(昭和5)年10月28日

2.2 兵士の育成

青年訓練所では、普段は在郷軍人が教練を指導していたが、査閲では、陸軍の中佐級の軍人が来て一日がかりで訓練の成果をみた。

青年訓練所から、富廣がもらった証書が三通残っている。縦13センチ、横20センチの証書には「精勤証」と書かれている。二年次、三年次、四年次と無欠席だったようだ。

当時の新聞を読むと、昭和天皇の熊本訪問を前に、親閲に参加する生徒たちが野営をしたり（九州新聞 昭和6年11月17日）青年訓練所の歌を歌いながら街頭を行進し演説を行ったりと（九州新聞 昭和6年11月24日）彼らが軍国の一翼を担っていたことがわかる。

富廣の日記を読んでも、出かけるのは、映画館のあった隣町、川尻や、遠くてせいぜい集落から10キロ離れた熊本市内である。農村を出ることが少なかった当時の農村青年に当時の教育機関の及ぼした影響は極めて大きいと言える。

3. 農村の状況

昭和初期の農村の状況も、農村青年と戦争との関わりに大きな影響を及ぼしていると考えられる。もともと農村には、地主制と、それに伴う多くの農民の貧困があった。そして昭和初期に日本を襲った恐慌が、農民にさらなる打撃を与えた。

3.1 昭和恐慌

1929（昭和4）年、アメリカのウォール街の株価の暴落に端を発し、世界を襲った恐慌は、日本にも飛び火した。1929（昭和4）年に貫あたり7円57銭だった春繭価格は、1932（昭和7）年には、2円52銭に暴落している。東北地方では凶作が重なって、わずか15銭の前借で娘の身売りも行われたという。⁶

熊本の農家の状況はどうだったのだろうか。ひとつの指標として、熊本県が1932（昭和7）年、県内15の農村を対象に行った農村の負債調査がある。調査は、自作農、自小作、小作に対して行われている。それによると、調査した5450戸の負債総額622万4012円で、一戸あたりの平均は1141円94銭となっている。⁷

自作、自小作、小作を、信用借、担保借、講金、買掛金の、四種類の借金の種類別でみると、自作農は、信用借、担保借、講金の順となっており、買掛金では最下位だが、合計では1506円5銭と最高額である。小自作農は四部門ともに二位で、合計額は自作農に次いで1322円49銭となっている。小作農は買掛金のみが最高の68円10銭で、全体として最低額の738円59銭となっている。

富廣の日記には、祖母の葬式をした際、叔父から借金をし

たことが記されている。

「祖母の葬式金計五十円を岡本叔父に返すことができた。人生借賃なかれ。まして借金は地獄への一里塚と誰かが言った。実に借のあれば妙に心に掛かって仕事の能率もほとんど上がらぬ」

1933（昭和8）年8月8日

納税も、農民を苦しめた。熊本県の税率は、全国と比べ高い。1926（大正15）年の所得に対する租税負担の割合は、全国平均25.4パーセントに対し、熊本税務監督局管内は33.1パーセントとなっている。税金別に、所得に対する負担割合をみると、国税は全国平均9.5パーセントに対し、熊本は9パーセント、府県税は全国平均6.4パーセントに対し、熊本は9パーセント、市町村税は全国平均9.5パーセントに対し、熊本は14.6パーセントとなり、大地主になるにしたがって反当たりの負担額が軽くなっている。⁸

富廣の昭和9年の日記である。

「税金納入4円30銭。今日までの日限で県税がきている。せっかく精出し筵の代金は税金にすっぽり。これでは一生かかっても貧乏の後追のようなものだ。とにかく出来る限りの辛抱はして、よく精出しして社会の人語に落ちないように努力しよう。青年時代は苦勞しても年老いて少しばかりでも楽になればそれで本望だ」

1934（昭和9）年9月10日

3.2 寄生地主

本来は自給自足で成立していた農村は、明治になって資本主義経済に引き込まれ、家内工業的であった本来のありようを壊されてしまう。農民は、肥料など近代工業の製品を買うことになり、零細な農民は、兼業化と小作化の道をたどった。地主層は、農民が手放した土地を集めて肥えて行った。

熊本県の統計によると、1892（明治25）年に45.7パーセントだった水田の小作率は、1902（明治35）年に47.7パーセント、1907（明治40）年に49.6パーセント、1913（大正2）年には50.1パーセントと、年々増加している。⁹

熊本は、全国的にみても、地主の力が強かった。1924（大正13）年の農林省の調査によると、50町以上を所有する大地主の数は、熊本県では104で九州で一番多く、全国で8位となっている。¹⁰

富廣は地主に上納米を収めたことを日記に記している。「おお今日こそ、待った橋本家の上納日だ。よし一番に出さんとねむたげなまなざしもしばし、加茂にリアカーを借りていった。隣に16俵ふたりで引かすとき我輩は相手はなし。ひとりで23俵ひとところにと終わった。汗ばんだ肌を黎明の風にふかすれば、おおまたとない気持ち。朝飯前に汗ばんだことは是を以って嚙矢とす。たくさんの上納米も無事納め終

わった我輩は何の苦もなく一日を過ごす」

1932（昭和7）年1月29日

この日、富廣は地主の橋本氏に23俵を収めている。

実収高に対する小作料率は、1936（昭和11）年、一毛田で44、1パーセント、二毛田で54、5パーセントとなっている。¹¹

小作料は、原則として現物納で、俵を二重にし、その中に米を入れて納めていた。

富廣が耕作しているのは6反の田と麦や野菜だ。農業だけでは生活がたちいかず、兼業をする者も多かった。

富廣は七島藺（しとうい）をつくっている。七島藺はカヤツリグサ科の植物で、乾燥したものを織って筵をつくる。筵が畳表となった。当時、七島藺はこのあたり一帯で広く栽培されており昭和40年代まで筵は農家の貴重な現金収入だった。5月ごろ植え付けをし、7月から8月の暑い時期に刈り取りをする。富廣は農閑期や農作業の合間にせっせと筵を編んでいる。

日記によると、富廣は、昭和8年2月3日、30枚を仲買人に収めて11円60銭を受け取っている。この30枚は6日間でつくっている。この時期は農閑期であることから、一年のうちでも比較的多くを収めていると思われる。

「朝から気合を入れて打ちかかりし故、細い辻のひとつひとつも寸となりし大となり枚となり。こうして立派な筵は重なりていく。おお単純なる一日。御身の今も在りて先を持って。そして先に向かって日新はすすむ。一步一步、高山に上るがごとく一日一日を朗らかに」

1934（昭和9）年1月15日

富廣は、道路工事などもしている。日当は、一日90銭内外と記している。

「トロ押し一日労苦の果てが90銭内外では余りと申さば安すぎるが、この農閑期、遊んでいては一文にもならぬ。塵も積もれば山となる如く、自然に上らなきや仕方がないわい。今日あたり大分疲労の色顔面に現れ、ああ雨ならばいいがなあ。雨を待つもの、それ肉体そのものにほかならぬ」

1932（昭和7）年4月17日

1934（昭和9）年は、全国的に凶作となった年だ。東北地方は冷害、中国地方は水害、そして四国九州地方は干害が農村を襲った。熊本県史には、「本県においても米の平年作170万石を大きく割って、実に158万250石に激減した」と記載されている。¹²

富廣はこの年の日記に、干害によって苦境に陥った状況を克明に記している。

「水稻不良にあいまって畑作もやはり結果が悪い。ゆえにこきびを下植えた。こきびとてもよくは生えない。午後は田中のぐろ切りに出た。田植えのままの水田の状態。以前の草は少しはとったが、又水田特有の草が生え揃っている。そしてまた水がない故に害虫に食われ枯死せんとする数たく

さんだ。ああ見る影なき稲。このままで穂ができるかしら」

1934（昭和9）年8月8日

日照りで田に水が届かず、日記には、川からの分水について、何度も県庁に陳情に行ったりしている様子が記されている。

そして十月、収穫も近づき、富廣ら小作農が、上納米の割合について地主と協議している。

「目前の稲の生育状態に死活問題の中心たる上納の事につきて協議成す。そのはく言言句句の中に深刻なる不景気なるを代表す。三俵見積もりにして一俵半、上納として決行せんとす。地主も小作も、ともにかような旱害に遭遇してはどちらも苦境は苦境だ」

1934（昭和9）年10月13日

地主側は、三俵あたり一俵半、50パーセントを上納米として納めるよう求めているが、小作側は受け入れられない様子だ。

深刻な恐慌は、全国的に、小作争議を拡大させることとなる。1926（昭和元）年の全国の小作争議件数は2751件だが、熊本県はこのうち11件、昭和2年は全国2053件のうち4件、昭和3年は全国1866件のうち熊本は2件などとなっている。筆者の渡辺は「熊本県における巨大寄生地主制による、隷属支配の堅固さと、農民操縦の巧妙さを反映したものであった」と述べている。¹³

3.3 移民の増加

このような中、故郷を出て、活路を海外に求める農民も多数いたようだ。1934（昭和9）年10月6日の九州日日新聞には、熊本県から、初めて満州へ渡る特別移民の記事が出ている。またこの年の10月9日の九州日日新聞には「農村窮乏の秋、海外渡航増加」との見出しの記事がある。記事には、「熊本県保安課渡航係の調査によれば、本年四月以降十月七日現在で、未曾有の干害地熊本県は全国第二位の移民県となった。第一位は福岡県で、熊本県で渡航免許を下付した者は一千六百四十二名で、既に渡航した者は一千二百九十一名に上り、干害地の八代、上・下益城、宇土など断然多数を占めている」と書かれている。¹⁴

富廣も、出征後、ツギエにあてた手紙に、移民を考えていることを伝えている。

「まあゆっくり考えてみよう。田の植え付けは君等も苦勞だがやっておいてくれ。支那へでも行けば良い就職の口でもあるかもしれないがとにかく思うようにはいかないね。然し百姓やっても月給生活者になっても、君や剛それから〇〇には不幸な目にはあわせないという覚悟でいるのだ。とんと当てにならない話だが何の若いうちの苦勞は左程でもないよ」

1937（昭和12）年5月17日

手紙にある「剛」は、富廣の第一子である。〇〇というのは、戦地からの帰還後に生まれる予定だった第二子のことであろう。

3.4 農村青年にとっての「軍隊」

これまでみてきたような農村の厳しい状況は、農村青年が、「国のために働きたい」と思う背景と関わりがあるのではないだろうか。『戦没農民兵士の手紙』の文面には、次のような記述がある。¹⁵

「近頃は大部寒くなり雪も降り、故郷では歩きにくい状態でしょう。それに今はゴム長とともなく、皆々様には不自由な事でしょう。学校に通っている子供等はゴム長が配給になったか。破れた靴をはいて歩いて居るでしょう。藤見は軍隊に來た御蔭でドロドロの道でも、立派な革靴をはいて歩いているよ」

「何処で鳴くのかカッコカッコとカッコ鳥の声もきいた。家にいた時はあのカッコの声も随分いそがしさを感じしめられたものだった。朝はあのカッコと競争して起床したものだったが、軍隊ではカッコの声をきいたとて別に大した忙しさを感じないよ」

「小生、お陰で軍人に来て、それ以上うまいものを食べております。」

「軍隊に入っては一つとして不自由なことはない」

支給される靴や食事に対する満足や、軍務より野良仕事の方がずっと重労働であることが書かれている。もちろん、家族に心配をかけまいという心配りもあるだろうが、当時の農村の状況を考えたとき、本心だと考えるのが自然ではないだろうか。

実際、富廣も、1933（昭和8）年の集落の夏祭りで、いつもの年なら、子供たちは新しい下駄を新調してもらえるのに、今年はそれがかなわないと嘆いている。

「8月10日！！其の日来るを寝もやらず待ちあぐんだ幼時の想い出。今数年足らずして身に初をまとわず世界の波のまにまに追われいく。新しい装いに飛び回る嬉しさは全く逝って経済の不況によって下駄一足としていただかれぬみじめさ」

1933（昭和8）年8月10日

軍隊で支給される靴や服は、農村青年も、それ以外の者も皆平等で、恵まれていると感じた農村青年も多かったかもしれない。

農村青年にとって「軍隊」とはどのような存在だったのだろう。富廣は、1937（昭和12年）11月に、二等兵から一等兵に進級しているが、そのときの気持ちを妻への手紙に表している。

「今日（11月29日）命令にて僕ら補助衛生兵の進級がありました。補助総数二百二十六名中四十名、一等兵を命ぜられました。幸いにも愚生も四十名中十番の序列を持ちまして一等兵に進級いたしました。これも一重に菓室幹部の方々の好き取り計らいであると深く感謝しております。早速留守宅にても、父上の写真と神酒を供えてください。苦しかりしひとつ星の印象も二つ星によって喜びにおののいております。しかしながら昔と違って決して浮ついてはおりませ

ん。剛の父として堂々と真面目に、一生懸命軍務に努力いたします故、この点何卒ご安心ください」

1937（昭和12）年11月30日

岩手県農村文化懇談会『戦没農民兵士の手紙』でも、出征兵士は喜んで家族に進級を伝えている。¹⁶

「幸に上等兵候補者に入って大いにガン張って居ります。高橋隊の重幸も相当の成績で上等兵候補者になって居りますから安心の程を」

先の見えない暮らしに追われる農村青年にとって、軍隊は、努力次第で出世のできる自己実現の場だったかもしれない。

『戦没農民兵士の手紙』のあとがきには、こう記されている。

「進級を知らず手紙の数々、万年上等兵である嘆き、進級のためなら前線さえ辞さぬの願い、星の数だけがものをいう軍隊であってみれば当然といえるにしても、何故これほどまでに進級を願ったのだろうか、（中略）御下賜金や勲章、貧しい階層の出身であればあるほど、そうしたものの重みがより強かったのではなかったろうか。

これまで、農村青年に共通する「国のために働きたい」という強い思いの背景を、農村の相互依存性や、当時の教育、農村の状況などから見てきた。

農村の青年が、比較的「迷いなく」死んでいったとするならば、井上富廣の孫でもある著者としては、幾分が救われるような気がしないでもないが、しかし、そのおかれた状況ゆえに、疑問すら感じずに死んでいったと考え直してみるならば、やはりそれ以上に、深い悲しみがこみあげてくる。

日中戦争やそれに続く太平洋戦争で、日本人の兵士、民間人合わせて310万人が死亡したと言われている。さらにアジア太平洋地域では莫大な数の命が失われた。

このような戦争の一端を、農村青年が担ったとするなら、当時の社会状況、すなわち、その格差こそ、問われなければならないのではないか。彼らは意図的にその状態に放置されたのだろうか。今後の研究課題としたいと考えている。

1. 日本戦没学生記念会『新版きけわだつみのこえ—日本戦没学生の手記』、1995、岩波新書、岩波書店
2. 岩手県農村文化懇談会『戦没農民兵士の手紙』、1961、岩波新書、岩波書店
3. 花岡興輝『鮑田町誌』、1972
4. 岩手県農村文化懇談会『戦没農民兵士の手紙』、1961、岩波新書、岩波書店
5. 田中一生『熊本県史近代編第4』、1963、秀巧社
6. 渡辺宗尚『熊本県農業の展開』、1993、熊本出版文化会館
7. 渡辺宗尚『熊本県農業の展開』、1993、熊本出版文化会館
8. 中村清『熊本県史近代編第3』、1963、秀巧社

9. 中村清『熊本県史近代編第2』、1962、秀巧社
10. 原田敏明『新日本郷土史大系 熊本県の歴史』、1962、
隆文社
11. 中村清『熊本県史近代編第4』、1963、秀巧社
12. 石川武彦『熊本県史近代編第4』、1963、秀巧社
13. 渡辺宗尚『熊本県農業の展開』、1993、熊本出版文化会
館
14. 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史史料編第9巻』、1994
15. 岩手県農村文化懇談会『戦没農民兵士の手紙』、1961、岩
波新書、岩波書店
16. 岩手県農村文化懇談会『戦没農民兵士の手紙』、1961、
岩波新書、岩波書店